「長かったけど、あっという間でした。」

校長　沖　田　浩　史

フィギュアスケートの浅田真央選手は、「『長かった』というか、『あっという間』でした。」と答えたあと、悔し涙があふれて言葉を続けることができませんでした。初めて出場したオリンピック、演技後のインタビューの言葉です。2010年２月のバンクーバーオリンピック。国内外から金メダルの期待を受けて出場したＳＰ（ショートプログラム）２位からの逆転をねらった浅田選手は、ＦＳ（フリースケーティング）でトリプルアクセルを２回成功させたものの、目標としていた金メダルには届かず、惜しくも銀メダルに終わりました。その後のインタビューで、冒頭の言葉が発せられたのです。

「長かった」と「あっという間だった」。そのときの浅田選手は、本当にそう感じたのだと思います。ＦＳの演技時間４分は、これまで味わったことのない緊張で、いつもより長く感じた一方で、その４分間はあっという間に終わっていた。別の見方をすると、オリンピックのために、日々練習を重ねてきた日々は本当に長かったけれども、終わってみるとあっという間だったようにも思える、という意味だったのかもしれません。

同じようなことは、皆さんも感じたことがあると思います。受験に向けて勉強しているときは、この生活がいつまで続くのだろうかと、毎日が長く感じる、けれども、真剣に取り組んだ日々は瞬く間に過ぎて、受験の日はすぐにやってきます。部活動でも、目標を達成するために計画を立て、地道に努力する毎日は、長く感じるかもしれません。

自分の実力がどの程度ついたのか、学習では定期考査や模擬試験などで（部活動では練習試合で）確認しながら、受験（大会）の日を迎える、努力する毎日は長いようで、終わってみるとあっという間だったと感じるものです。

浅田選手は、その後の４年間、自分のスケートを見直し、試行錯誤しながら練習を重ねました。そして迎えた2014年のソチオリンピックでは、ＳＰ16位を挽回するすばらしいＦＳの演技をした結果、メダルには届かなかったものの、充実感にあふれた晴れやかな涙を流しました。とても感動的な涙でした。

自分の進路実現に向けて努力を重ねる日々は、つらく長い道のりです。特に３年生にとっては、長く厳しい毎日かもしれません。できれば、人より早く、人より楽に終わらせたい。しかし、そこに、浅田選手のような、涙を流すほどの思いは生まれません。皆さんが最後に充実感を味わうことができるかどうかは、毎日の努力によって決まるのだと思います。日々、悔いのない努力を重ね、感動を味わってほしいと願っています。

この「進路の手引き」には、松山東高校の進路状況、大学情報のほか、先輩からのアドバイスなどが掲載されています。書かれていることを指針とし、自分の進路実現に向けて大いに活用してください。頑張る皆さんを、心から応援しています。